

# 仏教の中道論と環境問題

山本修一

## はじめに

今年（2007年）の春に「IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change)」つまり「気候変動に対する政府間パネル」が行われまして、その第4次報告がなされました。これは日本の政府でも翻訳をして発表しています。まず、その第4次報告の要約をお話したいと思います。

次に、過去の環境変動では、どんなことが起こっているのかという話をさせていただきます。

3番目に、現在は大きな環境変動の分岐点かもしれないという話をします。これは仮説の段階ではありませんが、現状のまま推移しますと、非常に大きな環境変動が起こる可能性があるということです。

そして最後に、以上を踏まえて仏教の中道論と環境問題、特に「縁起の智慧」と「中道の智慧」というものを用いて、仏教は環境問題に対してどのように取り組むことができるのか、について話をさせていただきます。

## 地球温暖化の現状…IPCC第4次報告から

### 温室効果ガスの増加

過去の大気中の二酸化炭素の濃度の変化を見てみると、近年急上昇していることが示されています。1750年を「産業革命の以前と以後」の境目として、現在の二酸化炭素の濃度を見ることになっています。

「産業革命以前」が、大気中の二酸化炭素の濃度が280ppmでした。ppmという単位は、大気の体積にして「100万分の1」を意味します。したがって二酸化炭素は大気中に280ppmから現在381ppmになってきていて、1750年から考えると、約250年間で100ppm増加しています。平均では年0.4ppmの増加になりますが、最近の増加率は高く1年間に1.9ppm、つまり約2ppmずつ増えてきています。このような増加率は、過去にはありません。

地球を暖める温室効果ガスには、二酸化炭素以外に

もメタンや亜酸化窒素などもあります。大気中の濃度は二酸化炭素に比べていずれも低いのですが、いずれも二酸化炭素と同じように近年急激に増加しています。

では、その二酸化炭素による温室効果は、どの程度のものでしょうか。温室効果というのは実は相当大きいのです。太陽の光だけで大気のない地球を暖めた場合、地球はマイナス19度ぐらいにしか実はならないのです。ところが、実際には平均気温として地球は約14度になっています。したがって、その差は約33度になります。この33度が地球の大気による温室効果になります。

大気の中に380ppmということは、本当にわずかの二酸化炭素やメタンとかが入っているわけですが、その効果というのは実は相当大きいということです。ゆえに今後、人間活動によって大気中の二酸化炭素とか、あるいはメタンが増えたと温室効果がもつともっと強くなっていくことが懸念されるということになります。

## 二酸化炭素の年間収支

二酸化炭素は、炭素の元素を含んでいます。そこで人間活動によって放出されている炭素の地球上における運命について考えてみます。これは地球上で人間の活動がどのような影響を与えているのかを考える上で、重要です。一番多く炭素があるのは海水の中です。海中には38000(単位…炭素としてギガトンを表す。以下同様)も二酸化炭素(実際は炭酸)として溶け込んでいたり、プランクトンとしてあります。その他、大気中には730、陸上植物が500、土壌に1500あります。これらは地球表層における炭素のストックです。

そして、これら炭素は地球上のさまざまな生物によって利用されて、循環、すなわちサイクルしています。炭素のサイクルには早いサイクルと、非常にゆっくりしたサイクルとが地球にはあります。

「早いサイクル」には、陸上のサイクルと海洋のサイクルがあります。陸上のサイクルでは、空気の中にある二酸化炭素を利用して、植物が光合成をしたり、

それを動物が食べるとか、あるいは植物も動物もやがては死んだり枯れたりするわけで、それを今度は微生物が分解をして大気の中に二酸化炭素として返していくサイクルが含まれます。海の中も同じようなサイクルがありまして、植物プランクトンが海の中には棲んでいるわけで、彼らは空気中の二酸化炭素ではなくて、水の中に溶けている二酸化炭素を利用して光合成をやっています。やはり陸上と同じように、海の生物は死んで、やがてまた大気の中に二酸化炭素として返っていきます。炭素の移動量は、陸上のサイクルが年間90、海洋が年間120程度と見積もられています。

一方、「遅いサイクル」は、早いサイクルからいわば漏れた炭素が循環しているものです。主に海洋で起こっていますが、それは海洋プランクトンなどの生物が死んで、微生物による分解を免れた炭素が堆積物に溜まります。その溜まったものが長い地質年代を経て、堆積岩になり、さらにはプレート運動によって地殻のマントルの中に潜っているわけです。そのマントルの中に潜った炭素というのが、火山の活動や、その他の

地殻変動とかの作用によって、二酸化炭素として大気の中に戻ってくる。そのサイクルが約1億年から2億年という非常にゆっくりとしたサイクルです。石油や天然ガスは、このサイクルに属します。また、このようなサイクルは陸上では、石炭などの生成に関連しています。

地球上の炭素のサイクルが以上のように早いサイクルと遅いサイクルがあるなかで、人間は何をしていることになるでしょうか。人間は化石燃料を燃やして、大気中に二酸化炭素を排出しているわけですが、この活動のどこに問題があるかということです。その本質は、化石燃料という本来、炭素の遅いサイクルにあるものを、早いサイクルの中に入れているところにあります。その量は、化石燃料の燃焼のほかに、土地利用の変化による二酸化炭素の放出も加わって、年間7・1になります。それが結局、空気の中に二酸化炭素が溜まってくる原因になるわけです。ただ、いまのところは人間が排出している炭素の量(7・1)は、もともと大気の中に730ですから、ちょうど100分の1

程度の量を放出しているわけです。そのすべてが大気中に蓄積しているわけではなく、そのうち海洋に1・9ぐらい溶け込んでいます。それと、陸上のほうでも光合成活動により、1・9ぐらい処理してくれている。ゆえに7・1に対して3・8ぐらいが海洋と陸上で処理されていますので、残りの3・3程度、つまり「人間による放出量の約半分が大気の中に溜まっている」ことになります。だから、大気の中に730ぐらいあって、それに対して人間は毎年3・3ぐらいずつ増加させている。それが早いサイクルの中に入り込んでいく。これが二酸化炭素による地球温暖化の本質になります。

#### 温暖化の影響

二酸化炭素などの温室効果ガスというものが増加することによって、実際に世界の平均気温が上昇してきていて、さまざまな現象として現われています。たとえば、最近12年(1995～2006年)のうちの11年間の世界の地上気温は、観測による記録が存在する18

50年以降で最も温暖な12年の中に入ります。また、ここ150年間で平均気温として約1度上昇しています。気温が上昇しますと、さらに別のところに影響を与えます。まず、南極やグリーンランドの水が解けます。水が解けると、海洋の水が増加し、海水面の上昇が起こります。海水面の上昇は、水が解けることによって起こるだけでなく、水の熱膨張によって一層大きくなります。具体的には、過去130年間で約20cmの海面上昇が観測されています。それも気温の上昇に呼応して、1961～2003年では1・8mmの年間上昇率であったものが、1993～2003年では3・1mmの年間上昇率になっています。

温暖化の影響は、地球の緯度が高い所に大きく影響が現われてきます。先ほど述べました平均気温で1度上昇という場合に、高緯度地域ではその数倍の影響が考えられています。そのため、南極、グリーンランド、また北極域では大きな気温上昇が見込まれます。実際、今年の夏発表されたものですが、北極の海水が解けて、その面積が史上最小になったことが報告されています。

一方、エベレストの水河やアルプスの水河が後退していることはよく知られた事実です。水河の後退は、気温の上昇による氷の融解だけでなく、雪に代わって雨が降ることや、雨（雪）量そのものの減少によることが知られています。いずれも温暖化の影響と考えられています。

### 過去の地球環境の変化

今度は過去の長い目で見た場合の地球の環境の変化というものをお話したいと思います。地球の過去の環境変化は、想像以上に大きなものであることが分かっています。また、過去の環境の変化を知ることが、将来の環境の変化を予測する上で極めて重要な情報を与えます。たとえば、気温が上昇あるいは低下したとき、いったいどのようなことが起こるのか、これを知る方法は、過去にその事例を求めるしかありません。ゆえに、過去を知ることが将来を知る上で、極めて重要です。

過去2000年間の気温変化を見えます。西暦1

まで海が侵入してきたことから、「海進の時代」と呼ばれています。日本でも関東地方の奥深く、埼玉県や群馬県のあたりまで海が広がっていました。1万年から2万年前は、氷河期です。現在よりも7〜8度気温が低く、陸上には多くの氷が張り出していました。そのため海水面は低下し、「海退の時代」と呼ばれています。この時代は「海進の時代」とは反対に、海水面が数10m低下し、関東地域の陸地が広がっていたことが知られています。現在のような暖かい時代を間氷期と言いますが、氷河期と間氷期は、ここ100万年間は10〜13万年の周期で繰り返していることが分かっています。このような周期が起る原因は、主に太陽と地球の関係、すなわち離心率、地軸の傾き、歳差運動で主要な部分は説明されています。これは発見した人の名にちなんでミランコビッチ・サイクルと呼ばれています。しかしながら、100万年以前には、そのようなサイクルがないことから、まだ不明な点も多くあります。

さらに何億年という長大な時代で気候を見てみます

と、次第に証拠も少なくなり、不確定要素も増加しますが、いつそう大きな変動があったことが考えられています。たとえば、恐竜のいた約1億年前頃の白亜紀、魚が出現し始めた約4億年前頃のデボン紀、動物が爆発的に出現し始めた約5～6億年前頃のカンブリア紀、これらの時代は現在よりもはるかに暖かく、陸上にはほとんど水がなかったと推測されています。また反対に、6～8億年前や、22～24億年前には地球全体が凍結していたかもしれないといった全球凍結の仮説も提出されています。

こうしてみると現在は、陸上にはある程度水があるような時代であり、水の全くないような時代と全球凍結の時代の中間的な時代であることが分かってきています。そして、いずれにしても、気温の変化と大気中の二酸化炭素などの温室効果ガスの濃度はおおむね連動していることが知られています。ゆえに、人為的な原因であるかどうかは別にして、気候が大きく変化することにより二酸化炭素が関わっているものと考えられます。

## 将来予測

IPCCにおいて描かれている将来予測には、6つのシナリオが考えられています。6つのシナリオとは、今後の人間の活動の仕方を6つの場合に分けて、それぞれ2100年ごろになるとどれぐらい気温が上がるかということです。

一番良いシナリオは、世界の人口は21世紀の半ばでピークに達したのちに減少し、地域間格差が減少し、さらに物質志向は減少し、クリーンで省資源の技術が導入されるといいます。この場合の予測は、1・1～2・9度で、最もありえる値が1・8度の気温上昇です。

一方、最悪のシナリオは、人口は先の場合と同様に考えるけれども、高度経済成長が続き、高効率化の技術は導入されるけれども化石エネルギー重視の場合です。この場合には、2・4～6・8度で、最もありえる値が4・0度の気温上昇です。もし最悪のシナリオで行くのであれば、平均で4度程度ですが、北半球の高緯度地域では10度程度の上昇が見込まれています。

現在でさえ世界の各地域で温暖化の影響が現実化していることを考えると、最悪のシナリオで行った場合には、どのような地球になるか、これは想像を絶するような影響が現われてくるのは間違いないでしょう。

### 現在は分岐点か

先に見てきたように地球は全球凍結のような随分寒い時代もあれば、氷が全くない暖かい時代もあったと考えられています。ロシアの気候学者ブデニコは、地球表面が受け取る太陽エネルギーと地球表面から逃げていく赤外線放射のエネルギーのバランスから、どのような状態の時に安定になるかの方程式を解きました。それによると、安定な解は2つあり、それが地球上に氷が全くないような温暖解と全球凍結のような寒冷解でした。すなわち、いったん氷が全くないような温暖になると、気候の揺らぎなどによって温暖化しても、また寒冷化しても、元に戻るようなフィードバック機構が働くため安定であり、反対にいったん全球凍結のような寒冷になると、同様の機構が働き元に戻ると言

っています。

では現在はどうかというところ、その中間に位置する不安定解としてエネルギー的にはバランスがとれているというものです。しかし現在の状態は、不安定で、氷が全くない温暖解にも、また全球凍結の寒冷解にも、どちらにでもシフトする可能性のある状態であることになります。しかしブデニコの方程式の意味するところでは、いったん安定な解になると、抜け出ることがないことになりましたが、実際の地球では、暖かい時代もあれば寒冷な時代もあるといったように、どちらかに落ち着いた時代があつたわけではありません。そこには安定な状態から抜け出るための何らかのメカニズムが働いたことが示唆されています。

その原因については、ほとんど理解が進んでいないようですが、むしろ、私たちが考えなければならぬことは、現在が不安定解の状態であつて、2つの安定解のどちらにでもシフトする可能性があるということでしょう。その意味では、温暖な解に向かって、いわばその引き金を人間活動が引いてしまっている可能性



があるということですが。

## 仏教の視点から

### 縁起と中道の智慧

話が変わりますが、環境問題に対する仏教の関わりについて話をしたいと思います。そこで、まず、仏教がどうして環境問題に関わるのか、についてです。仏教では、人間だけでなく生きもの全体を含めて「衆生」といいます。環境問題は、環境が破壊されたり、あるいは汚染されたりして、衆生が生きていく上で障害が生じることを意味しています。衆生にとって環境問題は、身体など物理的にも、また精神的にも苦悩を与えることになってしまいます。仏教の目的の一つは、衆生が生きていく上での苦悩を取り除くことにあります。ゆえに、そういった衆生の苦悩を救済するのが仏教者としては当然の使命となります。そういう意味で、仏教は当然、環境問題を克服するために努力をするということがあります。

さて、次に仏教が環境問題を考える際に重要な視点

を提供する考え方、ここでは「縁起の智慧」と「中道の智慧」について話をします。縁起とは、あらゆるものは関わりの中で存在するということです。この関わりには「空間的な関わり」と「時間的な関わり」が含まれます。空間的な関わりは、地球の中の生態系での関わりです。人間の場合でいえば、人間同士の関わりだけでなく、植物、動物、また微生物との関わり、さらに生物だけではなくて物理的なさまざまな物質、そして気圧や気温などとの関わりも含まれます。そして時間的な関わりは、人間や生物の進化と代々生まれ続ける生物との関わりのことです。人間の場合ですと、人間が生まれてくるには当然、地球の長い歴史の中で生物の進化の結果として生まれてきている。そうすると、当然、人間の先祖だけでなく、さまざまな生物があつてはじめて我々が生まれるわけです。ここでは、そのような生物の関わりを時間的な関わりということにします。

その空間的なつながりと時間的なつながり、全体を指して縁起といえます。そうすると、この縁起という

ものから考えた場合に、つながりというものを断つような人間の行為があったとするならば、これは仏教の立場からは否定しなければいけないということになります。このことを最もよく表現しているものとして、華嚴経の「帝釈天の大網」があります。帝釈天には網がかかっている。その網の結び目には宝石がある。その宝石がお互いに宝石を照らし出しているという話です。それが、「縁起」というものを非常によく表しています。まず、網があつて宝石が結び目にある。この宝石をそれぞれの生物の種と考えますと、網の糸が生物間の関わりを表すことになります。いわば地球上の生態系における生物間の関わりというものを表していると考えます。しかも、それぞれの宝石がそれぞれの宝石をまた照らし出したりしているというのは、それぞれの生物種は他の生物種というものを、いわば尊重しているとも考えることができます。また、宝石が自ら輝いていることは、それぞれの生物種が主体性をもつて生きていることを表していると考えられることもできます。つまり、網の中に人間がいるとすると人間だけが

決して偉いわけではなくて、すべてのさまざまな生物種というものがあつて、はじめてこの網が安定性をもつ。また、網は、網の目が小さくて、すべてがつながっているほうが当然強いです。ところが、この網というのはよく皆さんも経験されていると思いますが、どこか1つの網の目が切れたりすると、網全体がとたんに弱くなります。このことも生態系をよく表現していて、生態系にあつても、一つの生物種が減びることによって、生態系における生物種間のつながりが壊れて、それが他の生物種にも影響を与え、やがて生態系全体が壊れていく。これを表しています。これは「時間の関わり」からすると、種の進化の過程を破壊することにもつながります。したがって、生物種の多様性というものをいかに保つかというのは、仏教の縁起の観点からみても、極めて重要になります。

もうひとつ、「中道の智慧」という考え方があります。中道にはいくつかの考え方がありますが、その中に「苦楽中道」があります。苦楽中道は、釈迦の修行の仕方から導かれたものです。釈迦は、5人の比丘たちと

ともに、6年間の苦行をしますが、結局、悟りを得られませんでした。そこで、釈迦は、苦行によって悟りを得ることはできないと考えました。そして、乙女スジャータからもらった乳粥によって苦行で弱った体を回復し、菩提樹下において悟りを得ました。このことは、苦行主義の「苦」は、正しい智慧を生み出すには役立たないが、強い意志を築く上で役に立つことを意味します。一方、快樂主義の「楽」は、快適な状態であってこそ正しい智慧を得ることができることを意味します。したがって、苦楽中道は、快樂主義も苦行主義もどちらも決定的に否定もしないし、またどちらの価値も認め、なおかつ偏らず、調和を求めることです。ここで大事なことは、切り捨てないことで、これが非常に大事な観点だろうと思います。そして、偏らないこと、これが中道です。

環境問題において考えますと、環境問題には常に利益、不利益というものが伴います。たとえば、人間が自然の魚を捕るのは、人間は利益を得るわけですが、

自然は不利益をこうむるようになります。また別の観点では、先進国は、途上国から多くの自然資源を得ていますが、この場合には、先進国は利益を得て、途上国は不利益をこうむっていることになります。自然資源を得るところには、自然の破壊が常につきまといます。ゆえに、環境問題を考える際、「中道の智慧」からすれば、それぞれの利益あるいは不利益というものを認めて、利益・不利益を平等に調和的に配分することが要求されます。

前半での話は、地球の温暖化ということだけに限って話をしました。もちろん現在、さまざまな環境問題が起こっています。温暖化の話だけでは、仏教の「中道の智慧」や「縁起の智慧」をどのようにに生かせばいいのか、少し説明が足りません。そこで、環境問題を集約的に考えて、図1に示したように、「先進国」と「途上国」、そして植物・動物・微生物その他の無機的なものをひっくるめて「自然」として、構図的にはこの3つから考えてみたいと思います。温暖化だけではなくて、森林の伐採、生物種の多様性の減少など、さ

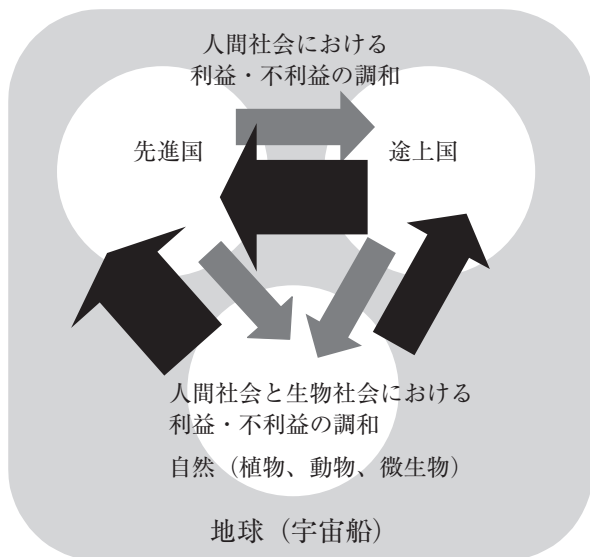


図1 先進国、途上国および自然における利益、不利益の流れ

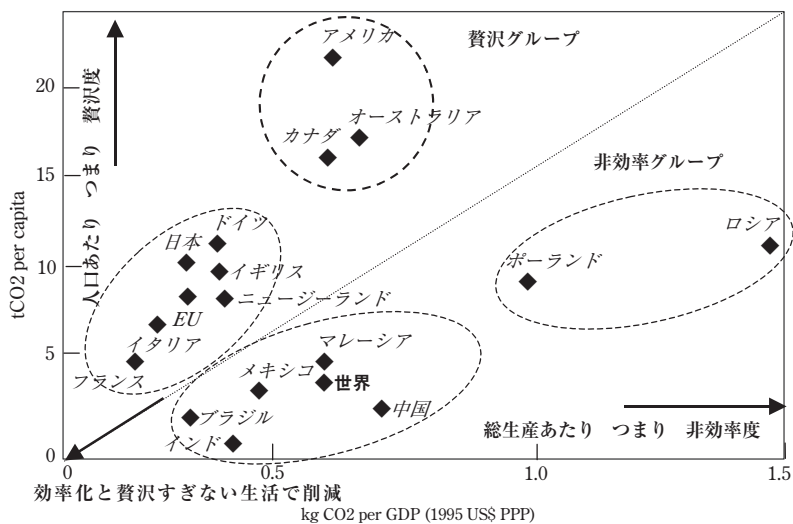


図2 各国の人口当たりのCO2排出量と国民総生産当たりのCO2排出量の関係

([http://kabuto.phys.sci.osaka-u.ac.jp/~higashij/lecture/coe\\_04/ondanka.pdf](http://kabuto.phys.sci.osaka-u.ac.jp/~higashij/lecture/coe_04/ondanka.pdf)) の図をもとに作成)

さまざまな環境破壊、環境問題が起こっているわけですが、この3つの構図でとらえていって、環境問題を今後よりよい方向の解決に導いていくためには、この3つの中での調和が大切になるだろうと考えられます。これは仏教における地球（宇宙船）倫理のあり方といえるものです。

図1に示した矢印は、利益の流れる方向とその大きさを太さで示しています。たとえば、先進国と途上国の関係で言いますと、いま利益というものは明らかに先進国側に傾いています。それを太い矢印で表しています。また、先進国と自然の間わりでみると、先進国にいる人たちは自然からさまざまな恩恵をこうむっています。一方、途上国の人たちも自然資源、すなわちさまざまな木を売って生活するというのは利益を得るという意味で、途上国の人々も利益を自然から得ています。しかし、その利益の大きさは、先進国の人々に比べて、少し小さくなっています。結局、利益を一番たくさん受けているのは先進国です。そして、利益を一番もらっていないのは実は自然です。つまり、自然

に対して何か人間が快適な環境を作ってあげるといった意味では、ほとんど利益を還元していないわけです。むしろ、先進国の人々は、自然資源をどんどんもらって快適な生活をしているだけです。だから、このバランスにおいて、いかに調和をとっていくかというのが、今後非常に大事な視点になると考えられます。

地球（宇宙船）倫理として重要なことは、これまでの発想であった「あれを取るか、これを取るか」という二者択一的な倫理ではなく、どちらも生かしていく発想と考えられます。仏教の中道の智慧に基づく発想は、そのどちらも生かしていく発想を取ります。全体的な調和を求めるわけです。その意味では、仏教はもともと「あれを取るか、これを取るか」というよりも、そうした問いそのものを立てないことが特徴だと思えます。たとえば、この構図の中で途上国と自然界とどちらを大事にするのかとか、そういう問いを立てない。これが宇宙船倫理に対して求められる発想だと考えます。地球全体が一個の乗り物であって、この中で我々は生きているわけですから、この中でいかにうまく調

和を保って生きていくかが特に大事になります。だから、そのときにどれを大事にするかではなくて、全体を含めて大切に扱っていく必要があると思います。

それからもう一つ大事なことは、いま利益というものが先進国に集まっています。そこで必要なことは、いかに適切な欲望のあり方を追求するかです。具体的なことを言いますと、図2は、世界各国の「1人当たりの二酸化炭素排出量」と「国民総生産当たりの二酸化炭素排出量」の関係を示しています。この図の意味することは、縦軸の1人当たりの二酸化炭素の排出量が高いほど贅沢な生活をしていることになりますし、横軸の国民総生産量当たりの排出量が高いほど非効率なエネルギー使用の仕方をしていることになります。アメリカ、オーストラリア、カナダが贅沢グループで、つまり二酸化炭素を大量に排出しながら、最も贅沢な生活をしていて、効率もあまりよくない。効率が一番悪いのはロシア、ポーランド、東欧です。技術的にちよつと遅れている部分があつて、非効率な部分がある。ただし、一人当たりの生活力、贅沢度はそれほど高く

はない。あと、ヨーロッパ、日本というのは比較的効率はいいです。日本は技術が進んでいるので、かなり効率的にもいいし、ちよつと贅沢な生活をしている。一番人口が多いところは中国、インド、この国々は、まだ開発途上であり、今後大きな経済成長が見込まれる。タイなんかは非効率であるけれども、ただ1人当たりの生活力はまだ低いので、贅沢度としては低い。このバランスというものを、いかにうまくとっていくかです。そういう意味では、図の左下の方向に集約させる必要があります。そのためには、我々も我慢しなければいけない。つまり現在の私たちの生活レベルを下げて、耐える必要がある。これが今後必要とされる条件だろうと思います。

人間と自然との関わりについての具体的な例をもう一つあげます。これは人間にとつての価値だけではなくて、自然にとつての価値を追求すること、先ほどの話の「利益を自然に対して還元する」ことの例です。それは、アメリカのフロリダ半島にあるエバーグレイズ国立公園の話で、ここでは日本の四国の1・4倍も

あるような広大な湿原の復元プロジェクトが行われています。ここは熱帯から亜熱帯までの気候帯を含み、極めて多様な生物種が棲息する場であったわけですが、1950年代に行われた湿原の埋め立てにより、1970年代以降、生物の多様性が急速に失われてきました。そのためユネスコは1993年に危機遺産に指定しました。そこで総事業費約1兆円、30年間の壮大な湿原再生事業を2000年に立ち上げました。現在進められていますが、世界から注目されている壮大な計画です。

我々仏教者としても、このような自然再生を推奨していく必要があります。なぜかという点、湿原というものとはほとんど価値がありません。人間にとってほとんど価値がないものだからこそ、いままで人間は人間にとつての価値物に改造してきました。ところが、いまになって考えると、実は自然にとつては非常に大きな価値があったということです。今後は「人間にとつての価値」ではなくて、「自然にとつての価値」を見直すということが要求されてくる。人間に

とつての価値だけではなくて、自然にとつての価値を追求する。さらに言えば、生態系における生物種の絶滅は最も避けるべきだというのが、仏教における縁起からも当然出てくる帰結になります。

### 菩薩道を「環境のための倫理規範」に

最後に、人間が理想的に行動するための仏教の倫理規範について話をしたいと思います。シュレーダー<sup>11</sup> フレチエットは「人類は科学や科学技術の領域については有能であるけれど、倫理的な思考や意思決定に対してわれわれは、悲惨とも言えるほど無能だ」と言っています（『環境の倫理 上』K・S・シュレーダー<sup>12</sup> フレチエット編、晃洋書房、1993）。これは、環境問題を解決しなければならぬことは世界の多くの人が認めるようになってきていますが、人間はなかなか理想的には動いてくれないことを言っています。

では、どうやったら理想的に行動してくれるようになるかが大事になります。つまり、環境問題を解決するために、いかに我々が実践を継続していくか、これ



が必要になるわけです。そこには、いわば何か仕かけを作る必要があるように思います。それは、環境問題の解決のために何か実践することが自分にとって何らかの利益になる、何かよいことが期待できる、そうしたものを社会の中に作っていかねばいけないのではないかと思います。一つは、社会の中に制度として、それを確立することが考えられます。たとえば、環境問題に貢献した場合には税金が安くなるとか、あるいは省エネルギー製品を買った場合には補助金を出すというのも、その例です。つまり、環境問題のために頑張った人には何かいいことがあるということを経済的な制度として、何か具体的に目に見えるようなかたちで作っていく必要があります。

もう一つ、仏教的な観点から言うと、環境問題の解決のために実践することが、それがそのまま仏教の意義をもっていることを保証することだと考えます。そこで、私が考えているのは、「六波羅蜜」という菩薩道の実践です。「布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧」のことです。「布施」は人や自然のために惜しみなく何

か善いことをする、「持戒」は戒律たとえば不殺生戒、不偷盗戒を堅持すること、「忍辱」は悲しいことや、つらいことがあっても耐えて、頑張ること、「精進」は最善を尽くして努力すること、向上心をもって継続すること、「禪定」は動揺しないこと、雰囲気流されないこと、最後に「智慧」は先に見てきた縁起の智慧、中道の智慧を学び、真実の認識力を得ることです。環境問題の解決のために頑張って行動することは、この菩薩道と実は非常にマッチングします。

ゆえに、環境問題のために頑張るということが、そのまま菩薩道としての「六波羅蜜」の実践になるのだという意義を確立する。それを宗教的な意味での倫理規範あるいは行動規範としていけば、もつと環境問題に対して仏教者も進んで貢献できるものと考えます。

（やまもと しゅういち／東洋哲学研究所主任研究員・  
創価大学自然環境研究センター・センター長）

（本稿は、2007年11月30日に行われた当研究所主催の  
公開講演会の内容をまとめたものです）